

♪ 2022年度 **poco a poco** ♪

Nr. 9 2022年7月14日(木)

文責:プファイル・辰巳

ミニコンサート

お楽しみ いただきましたか?

クラス合唱・合奏、ピアノソロに独唱、連弾や二重奏など、29組の演奏者のみなさんが次々と登場したミニコンサート。みなさんのご協力により、演奏した人も聴きに来てくださった方々も、みなですてきな時間を分かち合うことができたと思います。ありがとうございました。

音楽室の入退室はスムーズに進行していた反面、ロビーの方が混雑してしまったようです。2学期以降、待機場所について検討を重ねていきたいと思っています。また秋以降のコロナ感染状況も気になるころではありますが、どんな形態になるにせよ、工夫しながら2学期、3学期もミニコンサートが開催できるように努力したいと思います。

平日頃の音楽活動を充実させ、次回のミニコンサート出演を目指してください。今後ともご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

音楽こぼれ話 <その時、作曲家は・・・ ⑧ ムソルグスキー>

ピアノ組曲から管弦楽組曲へ「展覧会の絵」>

ロシアの作曲家ムソルグスキーが作曲したピアノ組曲を、管弦楽の魔術師と呼ばれたフランスの作曲家ラヴェルが後世オーケストラ用に編曲したことは、前回のこぼれ話で触れました。今回はその「展覧会の絵」についてのお話です。

モデスト・ペトローヴィチ・ムソルグスキーは1839年生まれロシアの作曲家です。代表作としては「展覧会の絵」のほかに、歌劇「ボリス・ゴドノフ」や管弦楽組曲「禿山の一夜」などが挙げられます。

幼いころから母親にピアノの手ほどきを受け、音楽を愛しながらも、ムソルグスキー

は10代のうちは武官になることを目指していたそうです。13歳で士官候補生になりましたが、音楽はムソルグスキーにとって、大切な存在ではありませんでした。

10代の終わりごろには、さまざまな文化人との出会いがあり、1958年、ムソルグスキーはついに軍務から退役し、作曲にかける時間がぐんと増えました。

ところが、それまで裕福であったムソルグスキー家が、だんだん零落し始め、さらに1865年には、ムソルグスキーが尊敬していたお母さんが亡くなるという悲劇にも遭遇しました。この頃からムソルグスキーは酒量が増え、アルコール依存症の兆しが見え始めます。

武官から一転、文官として働き始めたムソルグスキーでしたが、その職務はなかなか安定せず、報酬も一定していなかったそうです。しかし、芸術家としての生活は活発になりました。そして迎えた1874年、友人の画家ヴィクトール・ハルトマンが亡くなり、その遺作展覧会に足を運んだムソルグスキーは、その絵からインスピレーションを与えられました。そして出来上がったのがピアノ組曲「展覧会の絵」です。

ムソルグスキーはその展覧会で見た10枚の絵の印象をそれぞれ小品に仕上げ、絵から絵へと歩む自分の姿は「プロムナード」という短い曲にして前奏・間奏曲としてくり返し小品の間に散りばめていきます。こうして出来上がった「展覧会の絵」。この時ムソルグスキーは35歳でした。この頃がムソルグスキーの作曲家としての頂点と考えられています。その後は酒量がどんどん増え、体調も悪化し、転落の一途をたどります。

1881年初頭、4度目の心臓発作に見舞われた後、3月28日、41歳の若さでムソルグスキーは世を去りました。しかし彼の名曲「展覧会の絵」は後世の作曲家に愛され、先述のラヴェルだけではなく、多くの作曲家がオーケストレーションに取り組んだということです。

ほんのちょっとだけ 演奏会情報

フランクフルト・カイザードームのオルガンコンサート

7月22日(金) 20時から フランク、ラングレーのオルガン曲 他

入場料 13ユーロ

チケットホットライン 069 134 0400

